

## 日本の祭と神賑

—かみにぎわい—

—祭を読み解く羅針盤—

森田玲（玲月流初代 篠笛奏者 森田玲）

平成三十年九月十五日 於・ルブラ王山



### 一、自己紹介

### 二、講演の目標（祭の未来のために）

祭の過去、現在、未来の祭について議論するための基本を共有する。

### 三、神事と神賑行事（両者のバランスが大切）

ヒトの心の動きに注目し、祭を神事と神賑行事の二局面に分けて捉える。

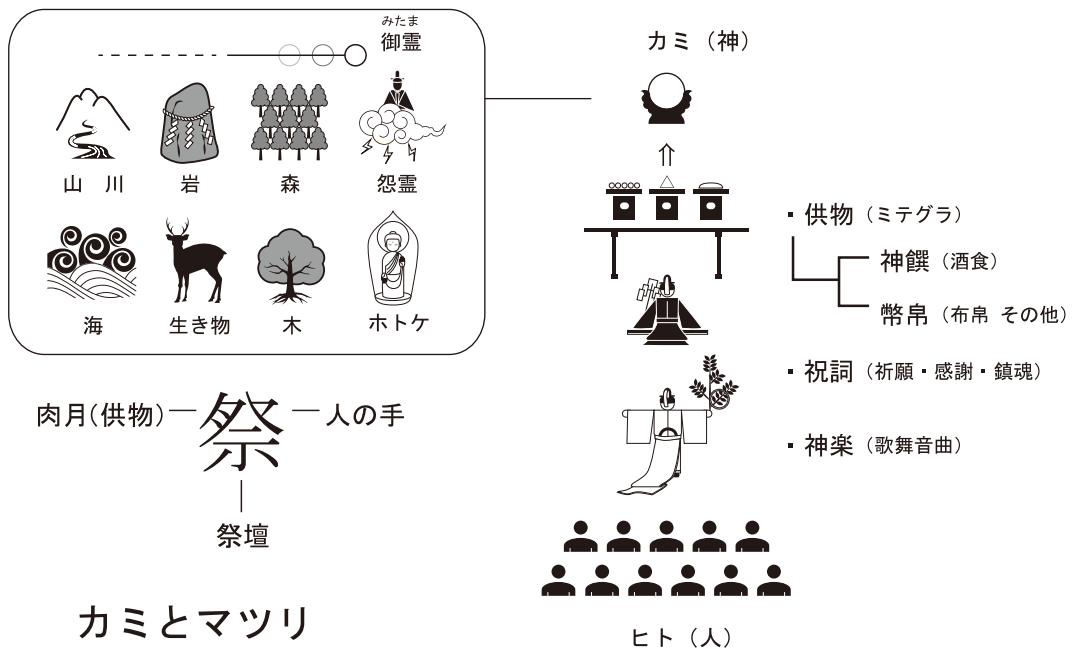
神賑は時代の流行を採り入れ多少派手な方が面白いが、暴走し過ぎると地域にとってマイナス効果も。神事はそのブレーキ役にもなる。

### 四、神幸祭の目的（ミアレ型・ミソギ型・オイデ型）

神輿をはじめとしたカミの道行きの目的を理解し、神事の重要性を確認する。

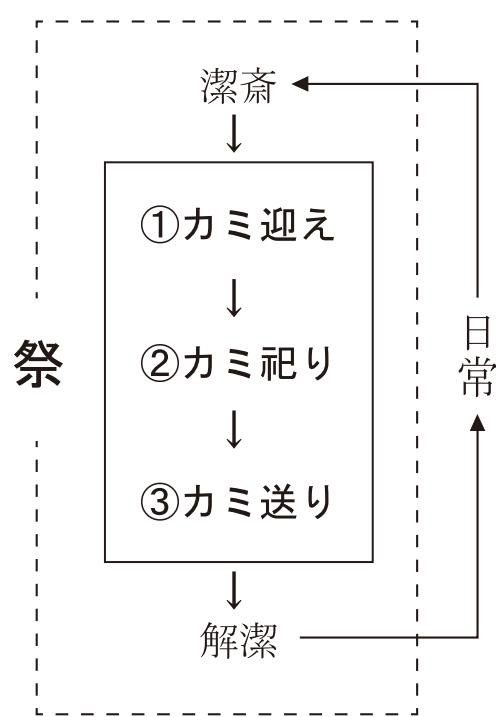
補、祭は誰のものか（共同体を維持するための民俗知）

祭の担い手の属性の変化から、未来の祭カタチを考える。



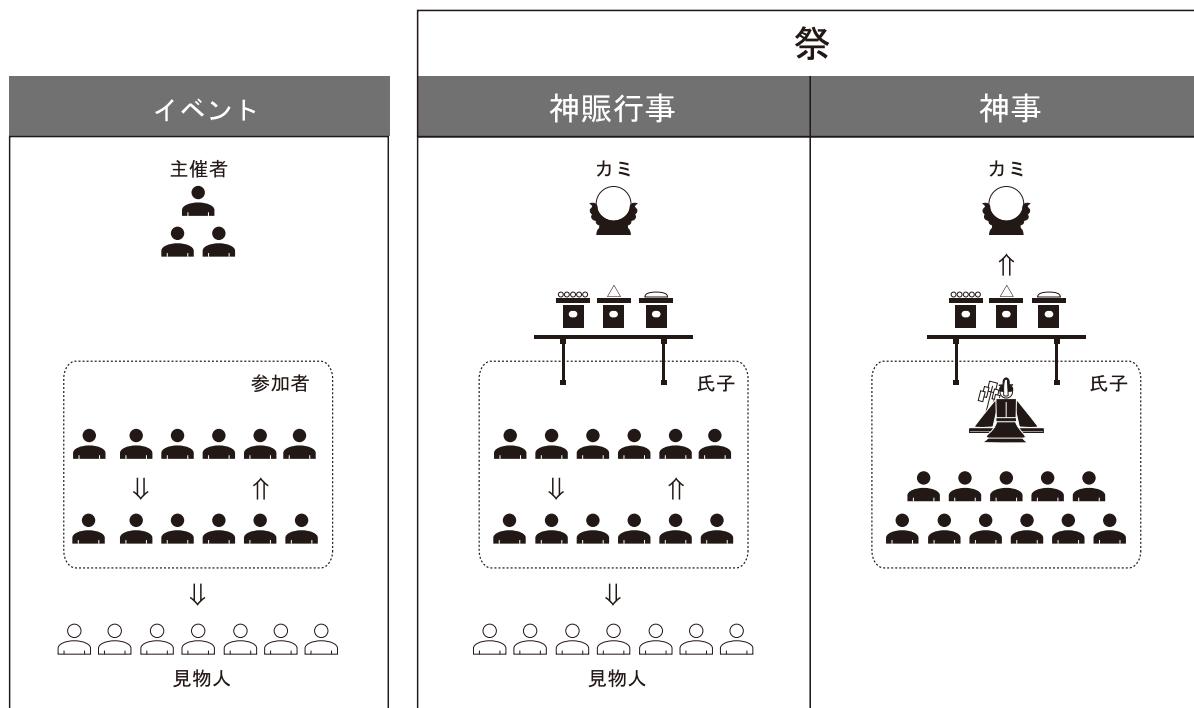
**祭の原義** 不可視のカミ（神靈）が現れるのをマツ（待つ）こと、そしてミアレ（御生れ）したカミをマツル、すなわちタテマツリ（奉獻し）、マツラフ（服従し奉仕する）こと。（菌田稔『文化としての神道』弘文堂）

カミ送り	カミ祀り	カミ迎え	
(左 義長) トンド 焼き	正月 鏡餅 棚	門松	年神
精 靈 送 り 流 し 鐘 火 し	盆 踊 り 盆 棚 り	迎 え 火	祖 靈
神 輿 を 遷 却	御 靈 会	神 輿 劍 鉾	惡 靈
田	家	田	田 神
山	田	山	



祭の三部構成

## 神事と神賑行事



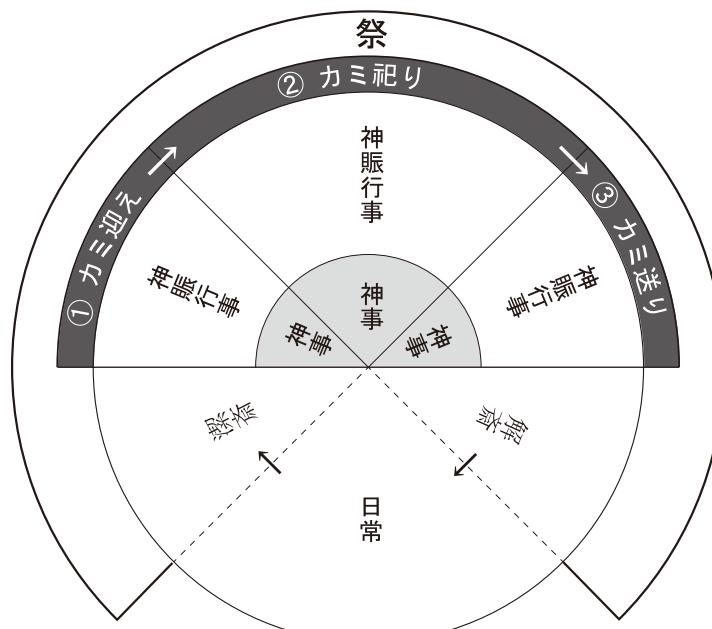
次々と異なる趣向を求める  
イベント内容に興味のある人々の集まり

昨年と同じ事を繰り返す傾向がある  
共同体全体の行事（神道＝共同体の宗教）

**ヒトの意識の方向による神事と神賑行事の概念** ヒトの意識がカミに向いている場合は神事。カミの存在を前提としながらも、ヒトの意識がヒト同士（氏子・崇敬者同士や見物人）に向いている場合は神賑行事とする。

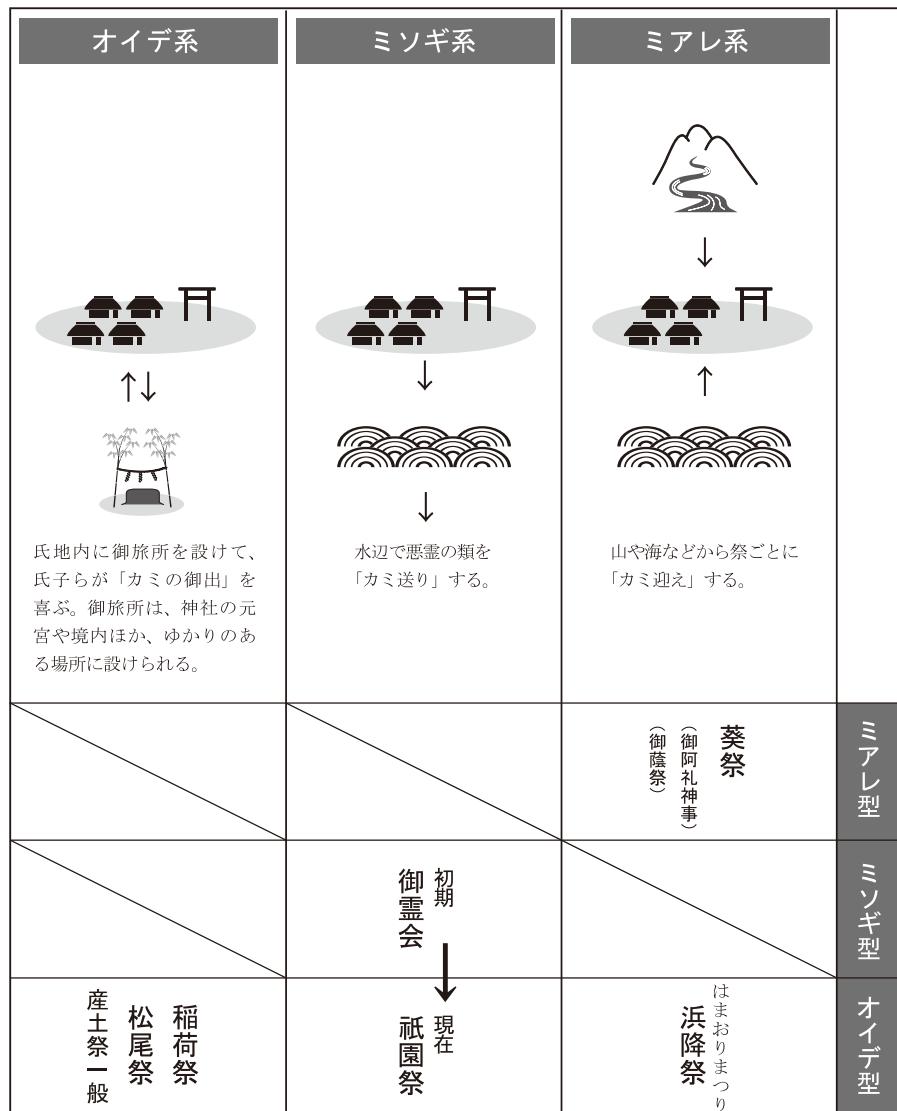
秋からさきは神事が多く、従つて神の心を賑はし申す行方が、社々で行はわれる。（中略）祭りがあると、芸能めいた所謂神賑ひの行はれるのが普通である。今日の人は、之を余興のやうに思つてゐるが、其は違ふ。祭り自体にとつて、極めて重要な部分だつたのである。（中略）神事から出て芸能化したいろいろの神賑ひを思ふと、信仰の根深さ、又形を変へて永続する強い意力を感じる。

昭和二十四年「神賑ひ一般」『明治神宮祭の栄』



祭の基本構造（三部構成 × 神事・神賑行事）

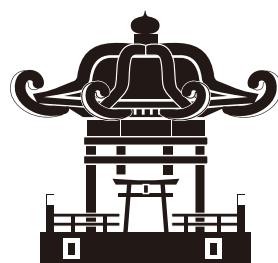
## 神幸祭の出自（系）と目的（型）



## 神輿の種類と来歴



純鳳輦型神輿



円堂型神輿



宮型神輿



鳳輦型神輿

明治・平安神宮の創設  
桓武天皇・孝明天皇の御靈  
既存の神輿より格式が高く  
感じられる

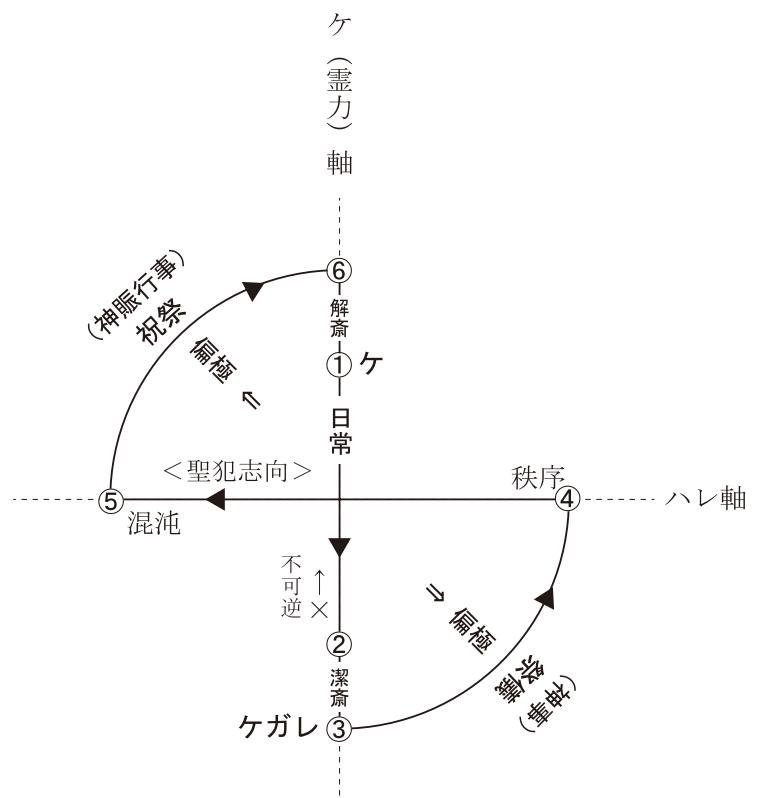
寺院の円堂がモデル?  
祭神の差別化

神社の社殿がモデル  
京都の古社に見られる  
後に仏教的莊嚴具

天皇の鳳輦がモデル  
東大寺大仏開眼会  
八幡神系  
仏教的莊嚴具

## 祭の社会的意義

**祭とは** 年に多くは一度、その土地の産土神が鎮まる神社を核として、氏地の環境、氏子の精神状態を日常の生活（ケ軸）とは異なる次元（ハレ軸）に移行させることによって、共同体の活力を更新するための「民俗知」。日常の行為を極端に様式化した「神事」と、極端にハメを外した「神賑行事」とで構成される。「祭」が有効に働くためには「神事」と「神賑行事」とのバランスのが大切。その土地の歴史、時間を越えた過去・現在・未来の氏子の連帶が喜びをもって認識される瞬間であり、現代社会では認識が難しくなっている、人智を超えたカミ（自然の力・霊的な存在）を実感できる貴重な機会である。

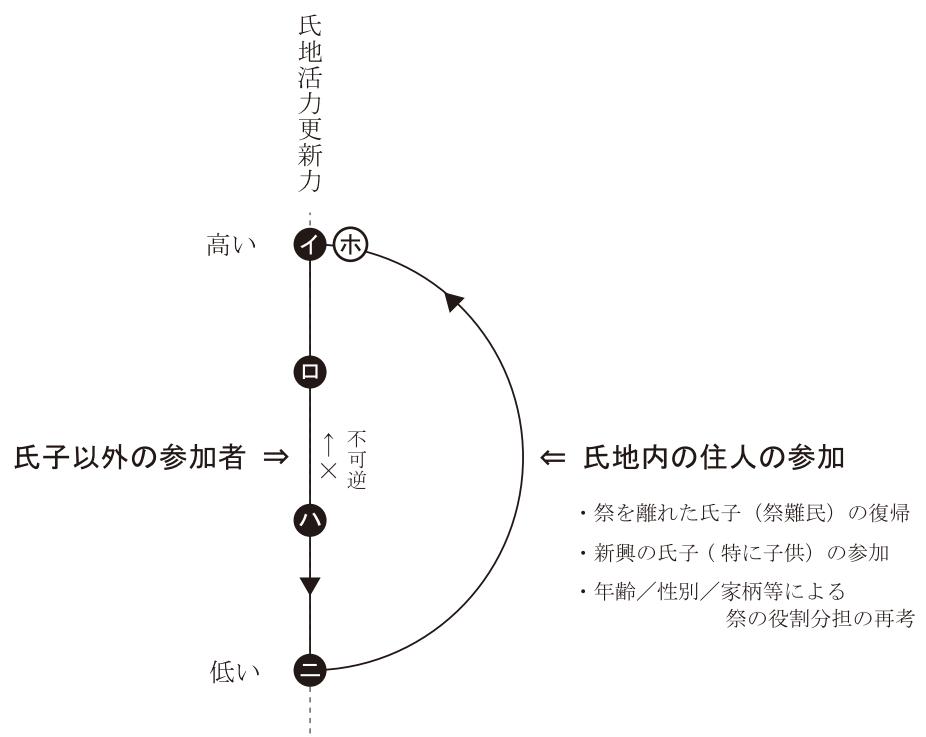


### 祭（神事・神賑行事）による

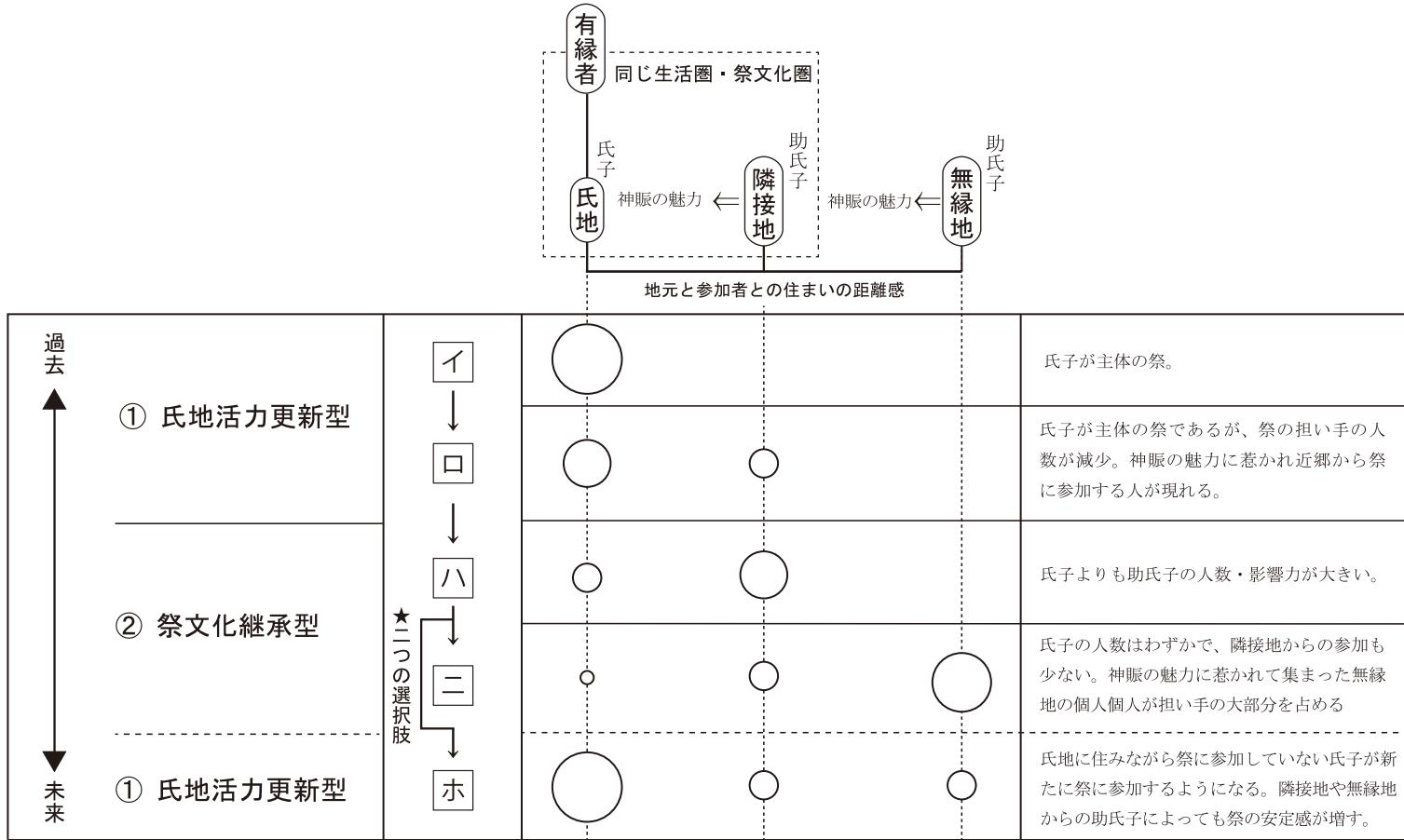
#### 「ケ（靈力）離れ・離れ」からの回復

<菌田稔『祭の現象学』の掲載図を基に森田が作図>

共同体の活力の減少とともに祭文化も衰退しつつある場合、「新たな祭のかたち」を創出し「祭の力」を用いることによって、共同体の活力を回復させることができるかもしれない。その場合、「近隣地」や「無縁地」からの「助け氏子」の力を借りつつも「氏地に住みながら祭に参加しない人々」の潜在力が最も重要となる。



### 祭の氏地活力更新力の低下と回復方法



○の大きさは人数・影響力を象徴的に示す。

### 担い手の属性からみた祭の意義（試案） 森田玲 2018

表は、ある町場で育まれた祭の文化が周辺地域に伝播し、その町場を中心に一定の共通した祭文化圏を形成している地域を想定して、過去、現在、未来の担い手の変化を示したものである。

「祭」の未来を考える時、「祭文化」を残すことを主目的とするのか、あるいは、「祭」の前提となる共同体の再構築・活性化を主目的とするのかによって、採るべき方法は異なってくる。

祭の担い手の出自を「氏地」「隣接地」「無縁地」の三つに分けた時、その構成によって、祭は①【氏地活力更新型】と②【祭文化継承型】の二つに分けることができる。

①【氏地活力更新型】【イ】は、祭の担い手のすべてが氏地の氏子で構成されている場合で（血縁者、あるいは特定の町や村と結び付くこともある）、かつて、すべての祭はこのような環境で育まっていた。この時、祭は共同体の活力を更新する役割を果たしている。

---

少子高齢化、生業の変化などで共同体の人口構成が変化すると、祭の担い手（主として華やかな神賑行事の担い手）が不足する。このような状況下では、同じ生活圏・祭文化圏の「隣接地」から「助氏子」（助っ人）として祭に参加する人が現れる。「氏地」側は人数不足を補うことができ、また、「助氏子」側は、場合によつては、自分たちの祭では味わえないような見物人の多い華やかな祭を楽しむことができたり、年に複数回の祭を楽しむ機会を得たりすることができる【ロ】。

---

「氏地」の担い手が減り続けると、「氏子」よりも「助氏子」の方が人数が多くなる【ハ】（「助氏子」の供給地は「氏地」よりも広範にわたるため、その供給量は比較的安定している）。祭の当日の様子は一見、①【氏地活力更新型】【イ】【ロ】の状態と変わらないし時には、それ以上の盛り上がりを見せることがある。しかしながら、「氏地」の担い手が少なくなっていることからも判るように、祭は「共同体の活力を更新するための機会」ではなく、「現存する祭文化の継承のための祭」へと、その意義が変化している。

---

祭の担い手が減少していく中で、どのようにして人数を確保すれば良いのか。例えば、次の二つの選択肢が想定し得る。一つは、「氏地」以外から積極的に人手を集めるという選択肢で、具体的にはインターネット・SNSなどを活用して、全国各地から「祭ボランティア」を集める方法である【ニ】。もう一つは、「氏地に住みながら祭に参加しない人々」が祭に参加したいと思うように「祭のあり方」を再構築するという方法である【ホ】

---

前者の【ニ】では、人手が欲しい「氏子」と、祭（日本文化）を渴望する「無縁地」の個人（多くは地元に祭がない）との利害が一致すれば、「祭の盛り上がり」に一定の効果が得られるかもしれない。ただし、この方法では「祭の日」は盛り上がったとしても、その共同体としての活力が更新されたとは言えない。

---

【ホ】は、過去のものとなった【氏地活力更新型】の祭を再び目指す方向である。「氏地に住みながら祭に参加しない人々」とは、具体的には、祭が好きだが様々な理由で祭を離れている人（祭難民）、祭の慣例によって年齢や性別によって祭に携わることができない人、そして、新たに氏地に引っ越してきた人々である。

---

ここで大切なことは「共同体の活力の減少にともない祭文化も衰退してしまった」という状況下において、「祭」（特に神賑行事）を直接的にどうにかしようとするのではなく、問題の本質である「共同体の活力」を「祭」を以て復活させようという発想を持つことである。「新たな祭のかたち」を「氏子自らが創出」し「祭の力を用いて共同体を再構築」することができれば、自ずから「祭文化」の継承が可能となる。その過程において「行政」との連携、「助氏子」の協力は不可欠であろう。その結果として、日常の生活においても、防災や教育、安全安心といった現代社会に必要とされている様々な要素を備えた地域社会を、未来の子供たちに残すことができるのではないだろうか。